

『FLEE フリー』

監督: ヨナス・ボヘール・ラスムセン

製作総指揮: リズ・アーメッド / ニコライ・コスター＝ワルドー

アニメーション監督: ケネス・ラデケア

2021年 / デンマーク・スウェーデン・ノルウェー・フランス / 89分



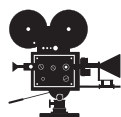
公式サイト

ブルーレイ・DVD 発売中

発売元: トランスフォーマー

販売元: TC エンタテインメント

©Final Cut for Real ApS, Sun Creature Studio, Vivement
Lundil, Mostfilm, Mer Film ARTE France, Copenhagen Film
Fund, Ryot Films, Vice Studios, VPRO 2021 All rights reserved



社会を旅する シネマ

きっと もっと 近くなる

きっと もっと 知りたくなる

紛争や迫害により故郷を追われた人の数は、2022年現在1億人以上。日本の人口約1.2億人に匹敵する。体感でとらえられないほど多い人数ゆえに見落としてしまいがちだが、そこには一人ひとり異なる人生と、「難民」というラベルだけでは括れない多様なアイデンティティが存在する。本作はその「一人の物語」をていねいにすくい上げた一作だ。

監督は高校生のとき、同じデンマークの田舎町に暮らすアフガニスタン難民のアミンと出会った。以来、長年の友人だが、彼がデンマークに来る前の人生はずっと語られずブラックボックスだった。30代半ばになり、二人はついにその過去を一緒に紐解くことに。アミンと家族の安全を守るため、インタビューの音源をベースに実写ではなくアニメーションで描き出したドキュメンタリーだ。

幼い頃はアフガニスタンの首都カブールに暮らしていたアミン。兄弟たちと楽しく遊んでいた記憶もあるが、父親は政治的理由で拘束され、行方知れずだった。ソ連崩壊後、情勢が悪化し、一家は唯一観光ビザが発行されたロシアへ逃れる。さらに長兄が暮らすヨーロッパを目指すも、頼れるのは密入国業者のみ。命懸けの道のりが待ち受けていた。

難民は「家や故郷を失った人たち」とされるが、アミンの半生を追っていくと、他にも数えきれないほど多くの「失うもの」や「背負うもの」があると気づく。青春らしい経験をできなかった寂しさ。助け

日本の人口と変わらない数の難民 その「一人」の人生を聴く

アーヤ藍

られなかった人への後悔の念。難民を食物にする警官への失望。人を物のように扱う密入国業者への怒り。安全に暮らすため「嘘の人生」を語り続けなければならない苦しさ。

「常に自分を守ろうとしてしまうんだ。安全な場所にいても」とアミンも語っているが、失ったものや背負い込んだものは、安全なデンマークで20年以上暮らしても、消え去ったり癒えたりするものではない。

アミンがデンマークで出会った同性のパートナーと新たな居場所を育む際にもその「抱え続けるもの」は、障壁として立ちはだかる。また、唯一のよりどころが自分の家族だったからこそ、それを失うことを恐れ、自分がゲイであるという事実葛藤を抱く。

加えて本作には「男性らしさ」の苦しみも垣間見える。アミンの家族は母と姉二人、兄二人だが、自分の人生を犠牲にしても家族を守ろうと奮闘するのは二人の兄だ。兄たちのおかげで今の自分があると語るアミンもまた「僕には大きな責任がある。成功しなくては」「タフでいることが大事」と気負う。彼らのそうした言動には「男性が家族を守るべき」という固定観念が滲み出ている。追い詰められた環境になるほど、そうした固定観念は強固になるのかもしれない。

6月20日は世界難民の日。1億人以上いる難民の「一人」に映画を通じて耳を傾けてみてほしい。



アーヤあい: 映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

